『おい貴様！いつまで余をこのような所に閉じ込めておくつもりだ！』
『くっ…このようなdisgrace(屈辱)…Admiralに合わせる顔がない…』
ギリ
『さっさと余を沈めたらどうだ！それともまだ何か余に用でもあるのか！』
『なんだそれは？何を持っている…深海棲艦共が付けていたモノに似ているが…』

『な、なんだ!?何をする!いテ!これを外せ!』
『ヨテ…なんだこれは…余の記憶が消されていく…!?』
『やめてくれ…Admiralとのmemories(思い出)を消さないでくれ…』
ビリッビリ
『……』

「Here…who are you…(ここは…貴様は誰だ…)」
「What?貴様は余のMy lordだと?何を言っている
余にはMy Admiralが……Admiralとは誰だ…?」
「sorry My lord、そうか…そうだったな
余はMy lordのsex slave(メス奴隷)だったな…♥」
ぽ〜〜〜…
「どうか先ほどの無礼を許してほしい、許してもらえるならなんでもしよう」
「忠誠のキスをすればいいのか?わかった、どこにすればいい?」

「そ、そこにするのか…？…いい、いや、My lordがそれを望むなら、余はなんでもしよう！」
「余、Nelsonは My lordに忠誠を捧げる
My lordの敵をなぎ倒し、My lordが望むなら余の体を捧げることをここに誓う」
「チュッ…これでいいのか？…そのままコレを舐めればいいんだな
わかったちゅっ、ちゅぱっ…ちゅ、ちゅ～…」
「んっ、んちゅ…ちゅぱ…れぇろ…れろれろ、れろっ…れろ…れろれろ…れろ～ろ
れろり…ぺろぺろ…ぺちゃ…ぺちゃ…」

ぺろぺろ
べろぉ♥
ぢゅるるっ
ぢゅぱっ

「My lord気持ちいいか…？
ぺろっ、ぺろっ…じゅる…じゅる…じゅっちゅ、じゅっちゅ！」

「んっ！んんんんんんんんんんうううううううっ!!!」
「んっ、じゅずっ…じゅずずず～」
…っぷはぁっ…amazing ejaculation（凄い射精）だな、My lord♥」
「んぐっ…んぐっ…lovely♥（美味しい）忠誠の見返りに
こんなに美味なセーシを飲ませてくれて感謝する♥」

ぶるるっ

ごくっ…
ごくっ…

ビクビクッ

「なに!?さらに褒美として新しい力までくれるというのか！
ah…My lord♥あなたは天よりも尊きお方だ♥」

ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
『これは…凄いな！余の体の中からどんどん力が湧いてくるのが感じられるぞ！』
『それにkoma(子宮)のあたりが熱い…♥
これが本当にMy lordのモノになるという感覚なのだな…brilliant♥(素晴らしい)』
『何か大切なモノを忘れている気がするが、そんなものが些細なことに思えてくる…♥』

「……どうだMy lord？新しい力を手に入れた余は？
……そうか、My lordに喜んでもらえて余も嬉しいぞ♥」
「それで……だな、またMy lordのおチンポをもらえないだろうか？」
「さっきから余のinstinct(本能)がMy lordのセーシを欲して止まぬのだ！」
「うむ！先ほどと同じく口で構わぬ！
余はMy lordの尊きセーシをもらえるだけで……♥」
ナデナデ

「すう～～、はぁ～～♥oooo smell!（いい臭いだ）」
頭が痺れるような、まさに余のMy lordにふさわしいおチンポだ♥」
「では頂くとしよう♥あ～んん、じゅるっ…じゅるるるっ、じゅるぶっ！
じゅぷりゅりゅ…じゅぶりゅ、ぶりゅりゅっ♥」
「んふっ♥亀頭もイジってやろう♥れろ…れろれろ、べろっ…ぺろぺろ…ちゅぱっ！
ちゅ、ぢゅるるるっ♥」
「ちゅ、ちゅぱ…ちゅる…れぇ～～♥ここが好きなのか？ならば、もっとしてやろう♥
れろれろ…れろっ…れろん、れろれろ♥」

ぢゅるるっ
ぢゅぱっ
ぺろ
ぺろ
べろぉ♥

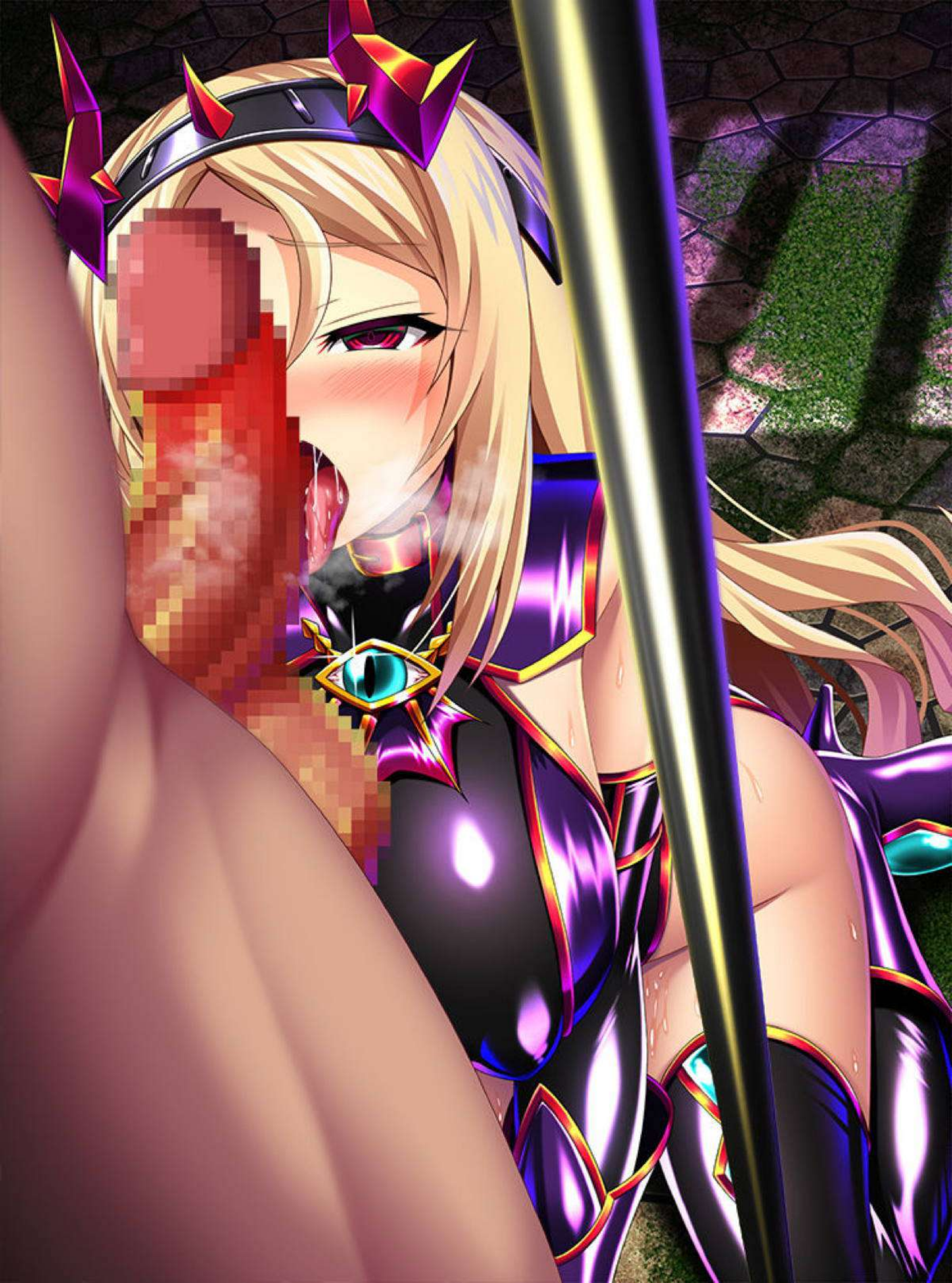
「ふふっ♥ピクピク暴れて…射精しそうなのだなMy lord♥
うむ、余の口に射精してくれあむ、れろっ…れろ～♥」

「んっんぶうううううっ♥♥♥…んぐっ…んぐっ…ごくんっ♥」
「プハーッ♥ぺろっ…なんと甘美な味だ♥余の全てを支配するような味だ♥」
「ふふっ♥飲みきれなかったセーシがまだ残っているな…」
あ～ん、じゅるるっ…じゅっぽ…じゅっぽ…じゅっぽん…じゅっぽん♥」

ぐるるっ

ごくっ…ごくっ…

ぢゅぢゅぢゅ

「じゅっぽ…じゅるるっ♥じゅぼぼ♥じゅぼっ♥じゅぼっ♥じゅずっ…じゅずず、じゅぞ♥
じゅぞぞぞぞっ♥」

「Wow!まだ出せるのか?Amazing!(凄いな)まるでfount(噴水)みたいだぞ♥」
「んっ、はぁ~♥体中からMy lordの臭いがするぞ♥とても臭くていい臭いだ♥」
「言ってくれればまた飲んだのだがな♥まあ、これはこれでいいものだな♥」
「さて、余の願いを叶えてもらった見返りになんでも余に命令をしてくれ♥」
むぁぁぁ…
ドロ
「My lordの敵を沈めてくればいいのか?それとも一晩中余の体を堪能してくれるのか♥」
「ふふっ♥すべてはMy lordの御心のままに♥」